

日本旧石器学会

ニュースレター 第59号

NEWS LETTER No. 59

JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION



中国の初期人類遺跡と旧石器研究の現状

泥河湾発見 100 周年および北京原人発見 95 周年国際会議参加記

村井 咲月・尾形 優真

1 本稿の目的

筆者らは2024年8月と12月に、中国で開催された国際会議に参加した。いずれも旧石器考古学史上、重要なイベントを記念するもので、中国の考古学者のほか多くの中国国外の研究者の参加があり、活気にあふれていた。彼らの記念講演や研究発表は、旧石器考古学を志す筆者らにとって刺激的であり、大変勉強になった。また、近年の中国の旧石器研究において、どのような主題に関心が寄せられているのか、どのような研究方法が採られているのかを知る機会にもなった。コロナ禍で海外との交流が比較的少なくなり、これから再開していく動きがあるなかで、中国における旧石器考古学の現状は、多くの日本の研究者にとっても関心があると思われる。本稿では、中国における旧石器研究の現状を、筆者らが参加した国際会議の様子を交えながら記述する。

2 泥河湾発見100周年記念国際シンポジウム

2024年8月20日から25日まで、中国河北省陽原の泥河湾研究センターにて、泥河湾科学発見100周年国際学術検討会が開かれた。泥河湾 (Nihewan) は、中国河北省張家口市、桑乾河北岸に形成された盆地である。1924年9月、スコットランド人で燕京大学の地質学教授であったバルボ (George Brown Barbour, 1890-1977) が、この地で発見した第四紀の湖底堆積物に泥河湾層と学名を与え

た。それから4日遅れ、水洞溝遺跡と薩拉烏蘇遺跡を発見したばかりのイエズス会神父リサン (Emile Licent, 1876-1952) が泥河湾に調査に入り、動物化石を発見している。これらが、泥河湾が学術的に見いだされた最初の出来事である (謝 2018)。

彼らの調査中に古人類化石や旧石器が発見されることはなかったが、リサン神父が集めたデータが、今日の泥河湾動物相の復原に役立っている。1965年には虎頭梁遺跡群で、細石刃が見つかった。以降、複数の遺跡が発見され、泥河湾一帯が旧石器時代遺跡の密集地として知られるようになった。このたび、最初に科学者の手が入った1924年から100年が経過したため、記念シンポジウムが開かれる運びとなった。

会場となる泥河湾研究センターは、小長梁遺跡への入り口を兼ねる、泥河湾国家考古遺跡公園の隣に位置している。壁で区切られた区画の中には科研楼 (Scientific Research Building)、宣教楼 (Publicity and Education Building)、餐厅 (Restaurant)、考古之家 (Home of Archaeologists) の四つの建物がある (図1-a)。そのほか、泥河湾で発見された遺跡名を刻んだ石碑やバスケットコート、雲梯や鉄棒、石割り場など、余暇を過ごすための場所も整備されていた (図1-b、c)。

ここに滞在する考古学者は考古之家で寝泊まりし、餐厅でbuffet形式の食事をする。部屋に案



図1 泥河湾発見100周年記念国際シンポジウムの様子 (1)



図2 泥河湾発見100周年記念国際シンポジウムの様子(2)

内された折に、記念品のカンファレンスバッグ、帽子、折り畳み傘、USBメモリなどをいただいた(図2-a)。宣教楼には遺物の整理や記録、保存作業用の部屋と、考古学者の研究室がある。展示施設が併設されているので、研究成果を知ることができる。150人規模の会場や会議室がある科研楼が、シンポジウムの会場となった(図2-b)。都会から離れているため、研究所の敷地内で1日の活動を完結させることができるようになっている。筆者らを含むすべての参加者が、シンポジウムの期間中、同じ場所で寝食をとにした。

シンポジウムの参加者(以下、敬称略)は、中国からIVPPの高星、北京大学の王幼平、李鋒、河北省文物考古研究院の謝飛と王法崗、諸大学の教員など100名超にのぼった。国外からの参加者としてはUniversity of SheffieldおよびUniversity of ExeterのRobin DannelとUniversity of ExeterのLinda Hurcombe、PaleoMongoliaのEvgeny RybinとArina Khatsenovich、University of WollongongのSam Linの姿があった。日本からは奈良文化財研究所の加藤真二、東北大学の佐野勝宏、南山大学の上峯篤史と大学院博士前期課程の学生である筆者らが参加した。

ミドルエクスカーションでは、馬圈溝遺跡、石溝遺跡、板井子遺跡、新廟庄遺跡、油房遺跡、于家溝遺跡といった、泥河湾における主要な旧石器時代遺跡をバスで巡った。初めて目の当たりにする黄砂の厚い堆積と、ほとんどの発掘調査区が発掘時の状態を概ねとどめていることに驚いた。新廟庄遺跡の発掘区では、10万年前ほどの地層を重点的に掘削しており、デニソワ人の痕跡を探しているのだと思われた。

学術発表は2日に分けて開催された。キーノートセッション4本のほか、口頭発表18本、ポスター発表12本が実施された。すべてのセッションが同一会場で開催され、参加者全員がすべての発表に耳を傾けることができた。

学術発表のなかでもっとも多く取り扱われた主題は、泥河湾における発掘調査の成果速報や、近年の新たな発見についてであった。具体的には、

泥河湾を対象に、湖と関連した遺跡形成、動物化石の分析と動物相の復原、骨に残されたカットマークなどから、動物骨利用を考察するものなどのトピックがみられた。理化学的手法であるルミネッセンス法の原理を説明したものもあった。発見から100年経ち、かつてはわからなかったことが解明されつつあるという、考古学研究の発展を感じることができた。

泥河湾の外を舞台とする研究発表も持ち込まれた。モンゴル、ロシア、日本、インドネシアなど、話題は国外の遺跡にまで広がった。李鋒は、2週間前まで発掘調査をしていたモンゴル・金剛太遺跡の成果を速報した。Linからは、インドネシア・リアンブア遺跡で発見されたフローレンス人の石器石材についての話があった(Lin 2023)。19~5万年前の地層の中に含まれる石器は主に珪質凝灰岩製なのに対し、それより上位の地層中の石器は主にチャート製である。遺跡周辺の河川ではチャートが拾えず、珪質凝灰岩が採集できたという。このことから、ホモ・フローレンシスとホモ・サピエンスとの間で、石器石材採取の方法と石器石材の選好性が変化したとした。

上峯は、京都府の上野遺跡で出土した石器群と、その産出状況、地層の帯磁率測定結果に着目し、海辺における先史人類の活動について発表した。特定の遺跡に限らず、寒冷期に人類が暖を得た方法の解明のため、動物解体と毛皮加工の実験をしたのはHurcombeである。実験で作成した毛皮を手を持ちながら発表する姿が印象的であった。

筆者らも、日本の旧石器時代遺跡を対象とする研究について、ポスター発表に臨んだ(図2-c)。公式のセッションタイムは限られていたが、ポスターは会議の期間中はずっと掲出されており、ほとんどの研究者がそれらを目にすることになった。そのため、セッションタイム以外で声をかけられることや、ポスターの前で言葉を交わす機会が多くあった。多くの研究者と話すきっかけとなった点は、口頭発表が一際目立つなかで、ポスター発表のメリットだと感じた。学生の発表者は筆者らしかいなかったため、その点でも目を引い



図3 北京原人発見95周年記念国際シンポジウムの様子(1)

たのかもしれない。また海外の研究者が、筆者らの研究に関心を持ってくれた様子から、フィールドが異なっても、問題意識や研究方法で通じる点が大いにあることを知った。

ポストエクスカーション（四台遺跡等の見学）も開催されたが、筆者らは研究センターに残り、板井子遺跡や新廟庄遺跡、金斯太遺跡の遺物を観察させてもらった。筆者が野帳に石器のスケッチとメモをとる様子を、中国人学生が興味深い様子で見ている。実測やスケッチによる石器の製作工程の理解は、日本の石器研究の基礎だが、石器研究の学び方や方法が両国間で異なることを強く感じた。

3 北京原人発見95周年記念国際シンポジウム

2024年12月2日から12月4日の3日間で、記念北京猿人第1頭蓋骨発見95周年国際古人骨学術検討会が、中国・北京市の西苑ホテルで開催された（図3-a）。筆者らも同ホテルで部屋をとって、相変わらず豪華な参加者への記念品を受け取り（図3-b）、シンポジウムに臨んだ。北京原人発見に関する国際会議は毎年5年周期で開催されており、今回は、1929年の第1頭蓋骨発見から95周年を記念するものである。

かつて北京では、竜骨として骨や歯の化石が売られており、20世紀初頭、そのなかに人類のものがあることが見いだされた。1921年に、スウェーデンの地質学者アンダーソン（Johan Gunnar Andersson, 1874-1960）と、オーストリアの古生物学者ズダンスキー（Otto Karl Josef Zdansky, 1894-1988）が発掘調査を実施し、人類の歯の化石を発見した。1927年、カナダ人の古人類学者ブラック（Davidson Black, 1884-1934）は、歯の分析から、新種の哺乳類化石「シナントロプス・ペキネンシス（*Sinanthropus Pekinensis*）」として報告した（Black 1927）。その後も調査が続き、1929年12月2日の午後4時過ぎ、地表面から約40メートルの深さになる裂け目から、ヒトの頭蓋骨が発見された。1936年までに、ほぼ完全な頭蓋骨が四つ掘り出されている。これらが北京原人の頭

蓋骨であり、ヒトとサル間のミッシングリンクとして、世界的な発見となった。

参加者は、8月の泥河湾における会議にも参加していたRobin DennelやLinda Hurcombe、Evgeny RybinとArina Khatsenovichのほか、オーストラリアやインドネシア、イスラエル、スペイン、タンザニア、アメリカなど、18か国から合計160人に及んだ。日本からは加藤真二、東京都立大学の出穂雅実と大谷薫、孟繁琇、札幌医科大学の松村博文、慶應義塾大学の河野礼子、山形県埋蔵文化財センターの大場正善、そして南山大学から上峯篤史と筆者らが参加した（図3-c、図4-a）。

ミドルエクスカーションでは、実際に周口店遺跡を訪問した（図4-b、d）。掘削を進めるにあたり、ときには爆破を伴ったほどの遺跡の大きさには驚いた。遺跡の天井には板が設置され、風雨から保護されていた。周口店遺跡の考古学的功績は、北京原人発見に限らず、その後の発掘調査を機械化し、効率よく調査を進めることができる発掘方式の考案にも一役買っている。大規模な遺跡を目の当たりにし、日本における遺跡保存とかかわっていくつかの示唆を得た。

学術発表は、プレナリーセッションとして、中国科学院古脊椎動物与古人类研究所の付巧妹、National Research Center on Human EvolutionのMaría Martín-Torresが登壇し、人類の進化に関して話した。キーノートセッションの主題は、Human Evolution and Environmental Adaptation（人類進化と環境適応）と、Paleolithic Culture and Behavioral Pattern（旧石器文化と行動パターン）の2種類が設けられた。前者では7名の研究者による、中国・周口店遺跡やインドネシア・サンギラン遺跡やンガウィ遺跡で見つかったホモ・エレクトス頭蓋骨の形態の比較、チベット高原におけるデニソワ人の高標高地適応と石器、完新世初期の穀類菜食痕跡とそれに伴う石器、OSL年代測定の見聞があった。後者では6名から、中期旧石器時代の石刃の始原の報告、古環境と石器、種としての進化の観点から、初期のホモ・サピエンスの中国への定着を説明するものなどが話された。加

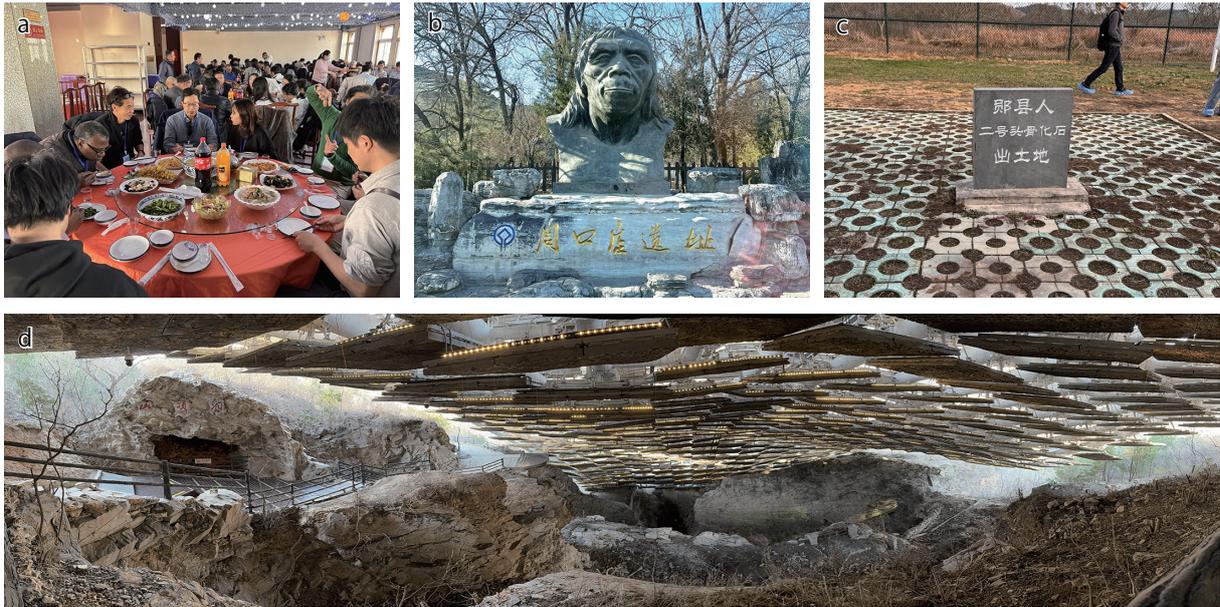


図4 北京原人発見95周年記念国際シンポジウムの様子（2）

藤真二もここで登壇し、熊本県・石の本遺跡の石器群における剥片剥離技術の分析結果と、大陸と古本州島の関係について発表した。北京原人発見を記念した会議であるが、キーノートセッションの話題は、中国のホモ・エレクトスに限られていなかった。さまざまな化石人類に関する最新の研究、特にデニソワ人は近年の熱いトピックであることが示された。また旧石器研究も、地中海沿岸から東アジアまで広い地域の話に富み、石器群の比較から広い視点で人類移動を論じるものが多かった。

筆者の印象に残った研究の一つに、Andreu Olléのものがある。彼はヨーロッパ最古のアシュリアンのBarranc de la Boella (Tarragona, Spain)遺跡の石器群を技術的に分析し、ヨーロッパで知られている前期更新世後期の考古学的記録のユニークな技術集団を明らかにした (Ollé et. al. 2023)。ヨーロッパにおけるアシュリアンの発生に焦点を当てた研究で、1.4 Ma までにアフリカを出発した初期人類の、これまで知られていなかった拡散を反映している可能性を指摘した。

筆者らはポスター発表で参加した。ポスター発表のコアタイムは設定されていなかったが、初日のコーヒブレイク中に議論できた。

口頭発表は分野ごとに分かれて開催され、① New Discoveries and Advances in Fossil Hominins (化石人類の新たな発見と進歩) ② Diversity of the Paleolithic Culture and Behavioral Patterns (旧石器時代の文化と行動パターンの多様性) ③ Multidisciplinary Integrated Research on Fossil Hominins Sites (化石人類遺跡に関する学際的統合

研究) ④ Graduate Student Session (大学院生セッション) の4会場が用意された。

筆者らは②の部屋にて、21本すべての発表を拝聴した。国際色豊かなことから、研究対象の地域や年代に偏りはみられなかった。ただし関心ある対象は、ネアンデルタール人やデニソワ人など化石人類と、彼らの関係に着目するもの、遺跡の年代に偏っているように思われた。そのため、石器群にみられる剥片剥離技法、行動的現代性を考察するもの、石英製石器を対象とした使用痕分析、石器石材消費戦略を語った研究が目をついた。これらは日本の旧石器研究でもよくみられる話題で、海外の研究者の何人かが、日本以外のフィールドで研究している事例を聞くことができた。

会議が終了したあとは、ポストエクスカージョンにも参加した。旅先は2種類から選択でき、筆者らは湖北省十堰市にある、学堂梁子遺跡を見学した。学堂梁子遺跡は、長江の支流である漢江沿いに形成された段丘上に位置している。この遺跡は1989年に、100万年前にさかのぼる可能性のあるホモ・エレクトス (鄖県人) が発見されたことで有名である (図4-c)。現在も発掘調査の最中であり、2022年に発見された3体目の鄖県人の頭蓋骨は、ユーラシア内陸部で発見された古人類頭蓋骨のなかでも、比較的良好な保存状態であった。2023年に新しく建設された、北京にある中国考古博物館でも目玉展示になっていた (図5-a, b)。

頭蓋骨No.3が発見された地点は、調査区ごと覆うように建てられたプレハブのなかで厳重に保管されていた。状態の良い哺乳類の化石に、石英製石器や多数の礫器が伴うようである。2022年に出



図5 北京市内各所の様子

土した、3体目の鄭県人の頭蓋骨を、特別に実見することもできた。

遺跡訪問の次の日には、学堂梁子遺跡を取り上げた国際シンポジウムが五つ星ホテルで開催された。中国語のスピーチ中には、即時英訳が流れるイヤフォンを提供されるなど、先日の北京原人に関するシンポジウムと同様か、それ以上の歓待を受けた。学生である筆者らにも、壁面色紙や記念帳にサインや感想が求められ、記入の様子をビデオカメラに収められた。学堂梁子遺跡から見つかる鄭県人の頭蓋骨は、数ある化石人類のなかでも比較的古く、保存状態が良いため、湖北省をはじめとする多くの国や地域から注目を集めているようだった。

4 国際会議に参加して考えたこと

国際会議に参加し、2024年は初めて中国を訪れ、中国をフィールドにする海外研究者と交流する機会となった。

中国の大都市は、街全体が清掃されていて、人も親切で、大変過ごしやすかった。特に支払い、すべてスマートフォン上に表示された、クレジットカードと連携したバーコード決済で済んだ点が便利であった。空港から北京までタクシーで移動し、地下鉄に乗り、買い物するのに発生する金銭のやりとりは、日本語で設定したアプリで完結した。そのため筆者らは一度も元紙幣を握らなかったし、言語の壁もほとんど取り払われていた。訪中前に考えていた、大気汚染で空が見えない、日本人に冷たそうという中国の印象は、北京市滞在中、考古学者らと長期間過ごした中では、一切感じなかった(図5-c)。

会議で出会った海外研究者たちは、研究方法や対象、関心などの点で多様性があり、その範囲の広さから、国内の会議とは違った雰囲気があった。今後の旧石器研究の可能性を感じさせるものでもあった。また、昨今の中国考古学の進展として、使用痕研究や石器使用の視点の拡充、理化学的研究方法の多用がみられる印象を強く感じた。研究の対象では、学史的な遺跡と新たな遺跡への

アプローチが両方みられ、未だ旧石器考古学の研究の熱は冷めやまないように感じた。

旧石器研究者との交流が簡単にできる点は、国際会議に参加することの最大のメリットだと考えられる。旧石器研究を牽引してきた研究者らに、日本の学生として発表を聞いていただけたし、同年代の海外の学生と仲良くなることもできた。研究者間の交流を広げる絶好の機会となる国際会議に、次回もぜひ参加したいと思う。

謝辞

中国滞在中、加藤真二、佐野勝宏、松村博文、河野礼子各先生に親しく接して頂き、滞在がいろいろ充実したものとなった。訪中および本稿の作成にあたり、上峯篤史先生にご助言を賜った。本稿は、1.2.4.を村井、3.を尾形が作成し、筆者らでまとめた。

〈引用文献〉

- 謝飛 (2018) 「泥河湾旧石器時代考古的回顧与展望」『河北師範大学学报(哲学社会科学版)』3、pp.5-11。
- Black, D. (1927) On a lower molar hominid tooth from the Chou Kou Tien deposit. *Palaeontologia Sinica, Series D* 7, 1-29.
- Lin, Sam C., White, Lloyd T., Jatmiko, Julianto, I Made Agus., Tocheri, Matthew W. and Sutinka Thomas (2023) Characterising the stone artefact raw materials at Liang Bua, Indonesia, *Journal of Paleolithic Archaeology*, 6-22.
- Ollé, Andreu., Diego, Lombao., Asryan, Lena., García-Medrano, Paula., Arroyo, Adrián., Fernández-Marchena, Juan Luis., Yeşilova, Görkem C., Cáceres, Isabel., Huguet, Rosa., López-Polín, Lucía., Pineda, Antonio., García-Taberner, Antonio., Fidalgo, Darío., Rosas, Antonio., Saladié, Palmira. and Vallverdú, Josep (2023) The earliest European Acheulean: new insights into the large shaped tools from the late Early Pleistocene site of Barranc de la Boella(Tarragona, Spain), *Frontiers in Earth Science*, 11, 1-29.

アジア旧石器協会 (APA) 第12回大会について

日本旧石器学会ウェブサイト、メーリングリストでお知らせしている通り、2025年6月20-24日にアジア旧石器協会第12回大会が仙台の東北大学で開催されます。世界16の国と地域から、126名の参加が見込まれています。

本大会の初日6月20日には、中国科学アカデミー古脊椎動物・古人類学研究所の高星教授の特別講演が企画されています。大会は、シンポジウムと一般発表セッションで構成されます。シンポジウムのテーマは、“Early Upper Palaeolithic in Asia: Commonality and diversity after the IUP”です。シンポジウムの冒頭に、イギリス・エクセター大学のロビン・デネル教授による基調講演があります。シンポジウムでは、IUP後のアジア各地域における継続性や多様性について発表・議論されます。一般発表セッションは、3つのテーマの口頭発表セッションとポスター発表セッションが用意されています。口頭発表とポスター発表では、多様な時代、地域、研究方法を扱った多くの研究成果が紹介される予定です。発表申し込みされた皆様のご協力のおかげで、魅力あふれる発表が揃いました。特に、諸事情により口頭発表からポスター発表への変更をご承諾いただいた皆様には、プログラム委員会一同ご協力に感謝申し上げます。

本大会最後には、エクスカージョンが予定されています。エクスカージョンでは、山形県の日向洞窟遺跡を見学する予定です。また、うきたむ風土記考古資料館では、当館が所蔵する後期旧石器時代の資料の他、東北大学や山形県埋蔵文化財センターが山形県で発掘調査した旧石器時代資料を見学いたします。エクスカージョンの最後には、仙台市の地底の森ミュージアムを見学いたします。

なお、初日(20日)と2日目・3日目(21・22日)では、会場が異なりますのでご注意ください。20日は東北大学片平キャンパス知の館 (<https://www.tfc.tohoku.ac.jp/jp/access.html>)、21・22日は東北大学川内キャンパスマルチメディア教育研究棟 (https://www.tohoku.ac.jp/map/ja/?f=KW_A05) が会場となります。詳しくは、3rd Circular や日本旧石器学会ウェブサイトをご覧ください。なお、20日のWelcome partyと22日のFarewell partyに不参加の方、21日・22日の弁当が不要な方は、フードロス回避の観点から、お手数ですが大会事務

局 (apajapan2025@gmail.com) までご連絡ください。大会に関する最新情報は、日本旧石器学会のウェブサイトでご確認ください。アジア旧石器協会第12回大会に関するお問い合わせは、大会事務局にご連絡ください。参加登録された皆さんに仙台でお目にかかるのを楽しみにしております。

PROGRAM

JUNE 20 (FRIDAY) TOKYO ELECTRON House of Creativity (B 02), Katahira Campus

15:30-17:30 Registration

16:00-17:30 Special lecture: Paleolithic industries in China and implications for hominin evolution trajectories in East Asia

Prof. Xing Gao (Honorary president of APA, IVPP, Chinese Academy of Sciences)

18:00-20:00 Welcome party

JUNE 21 (SATURDAY) Multimedia Education and Research Complex (A05), Kawauchi Campus

09:00-09:05 Welcome address 1 – *Hiroyuki Sato* (President of APA)

09:05-09:10 Welcome address 2 – *Takashi Tsutsumi* (President of JPRA)

09:15-11:45 Session I: Recent progress in studies on lithic technology and paleoanthropology of genus *Homo* in Asia

09:15-09:30 *Yosuke Kaifu, Chih-Hsing Lin, & Yu-Lin K. Chang*

Palaeolithic seafaring in East Asia: Theory, experimental voyage, and simulation

09:30-09:45 *Chengqiu Lu*

Discovery and research at Xuetaoliangzi, the Yunxian Man site

09:45-10:00 *Wenting Xia & Shejiang Wang*

Lithic technological continuity and innovation in the late Middle Pleistocene: A case study from the Longgangsi Locality 1 in the Hanzhong Basin, Central China

10:00-10:15 *Xiaoling Zhang, Shejiang Wang, & Xing Gao*

Paleolithic discoveries and research on Tibetan Plateau

10:15-10:45 Coffee break

10:45-11:00 *Yongwook Yoo & Minsoo Kim*

Late Pleistocene handaxe assemblages from the Korean Peninsula: Their age and regional characteristics

- 11:00-11:15 *Yoshihiro Nishiaki, Azad Zeynalov, & Yagub Mamadov*
The Middle Paleolithic lithic industry of Taglar Cave, Azerbaijan, in the South Caucasus
- 11:15-11:30 *Arina Khatsenovich, Evgeny Rybin, John W. Olsen, Alexey Klementiev, Junyi Ge, Snezhana Zhilich, Dashzeveg Bazargur, Yadmaa Tserendagva, Byambaa Gunchinsuren, Daria Marchenko, & Irina Vishnevskaya*
Lithic industries, climatic background and chronology of Middle Paleolithic in Mongolia
- 11:30-11:45 *Ke Shen, Feng Li, & Xing Gao*
Exploring the Middle to Upper Paleolithic transition in Northern China: Technological variations at the Xujiacheng Site and Shixiakou Loc. 2
- 11:45-13:30 Lunch (12:10 – 13:10 JPRA General Assembly, Kawauchi Lecture Rooms C [A04])
- 13:30-18:00 Symposium: Early Upper Palaeolithic in Asia: Commonality and diversity after the IUP**
- 13:30-13:40 Opening address – *Katsuhiko Sano* (Chair of program committee)
- 13:40-14:40 Keynote lecture: Settlement, survival and extinction in the steppe during and after the IUP in MIS 3**
Prof. Robin Dennell (Department of Archaeology, University of Exeter)
- 14:40-15:00 Coffee break
- 15:00-15:20 *Nicolas Zwyns, Masami Izuho, Tsendorj Bolorbat, Clea Paine, Guunii, Lkhundev, Davaaku Odsuren, Fumito Akai, Igor Djakovic, Damien Flas, Jovan Galfi, Giulia Gallo, J. Christopher Gillam, Fumie Iizuka, Corey Johnson, Timothée Libois, Madison McCartin, Yuichi Nakazawa, Solange Rigaud, Shunsuke Totsuka, Peiqi Zhang, Byambaa Gunchinsuren, & Sahra Talamo*
The Early Upper Paleolithic at Tolbor-17 and its significance for the regional cultural sequence
- 15:20-15:40 *Evgeny P. Rybin, Arina M. Khatsenovich, Dmitry V. Kobylkin, Kseniya A. Kolobova, Byambaa Gunchinsuren*
Cultural transfers and shifts in the Early Upper Paleolithic of North-Central Mongolia
- 15:40-16:00 *Feng Li*
What happened after Initial Upper Paleolithic in Northern China: An overview of the regional lithic technological variations between 40 to 25 ka BP
- 16:00-16:20 *Peiqi Zhang, Nicolas Zwyns, Fei Peng, Sam C. Lin, Corey L. Johnson, Jialong Guo, Huiming Wang, & Xing Gao*
After the blades: An Early Upper Paleolithic core-and-flake assemblage at Shuidonggou Locality 2, North China
- 16:20-16:40 Coffee break
- 16:40-17:00 *E. Andrew Bennett*
The genetic landscape of Upper Paleolithic Northeast Asia
- 17:00-17:20 *Kaoru Otani & Eunjeong Kim*
Lithic reduction patterns and assemblage diversity in the Early Upper Paleolithic of the Korean Peninsula
- 17:20-17:40 *Shunsuke Totsuka, Kazuki Morisaki, Masami Izuho, & Katsuhiko Sano*
Origin, population dynamics, and cultural complexity of the Japanese early Upper Palaeolithic
- 17:40-18:00 *Masaki Fujita*
Human, culture, and nature in the Ryukyu Islands after Early Upper Paleolithic
- 18:15-19:15 APA board meeting (Kawauchi Lecture Rooms C [A04])
- JUNE 22 (SUNDAY) Multimedia Education and Research Complex (A05), Kawauchi Campus**
- 09:00-12:00 Session II: Early Upper Palaeolithic technology, fauna, and site formation in Asia**
- 09:00-09:15 *Yueshu Zhang, Feng Li, & Christopher Miller*
Site formation of the caves in the steppe region: A case study on a Middle to Upper Paleolithic sequence at Jinsitai by means of micromorphological analyses
- 09:15-09:30 *Yixiao Li, Xiaomin Wang, Keliang Zhao, & Feng Li*
Diachronic subsistence strategy changes at the Jinsitai Cave, North China

- 09:30-09:45 *Fei Peng & Guo Chen*
Beyond Shuidonggou onset of the Late Paleolithic in North China
- 09:45-10:00 *Wencheng Li*
Technological transition of small-sized flake tool industry in the Chinese Central Plain at ca. 45 ka BP
- 10:00-10:15 *Sujin Gwon*
Diversity of raw materials use during the EUP on the Korean Peninsula
- 10:15-10:45 Coffee break
- 10:45-11:00 *Jihyo Park*
Zooarchaeology intersects with “Zoogeography”: A prospective comparative study of Northeast Asian fauna through the diversity of the MIS3 megafauna on the Korean Peninsula
- 11:00-11:15 *Hiroyuki Sato*
New explanation of the beginning of the Upper Paleolithic in Japan
- 11:15-11:30 *Noriyoshi Oda, Kazuki Morisaki, Akira Iwase, Dai Kunikita, & Minoru Yoneda*
Deciphering the palimpsests and identifying the earliest Upper Paleolithic occupation level in Musashidai site, Central Japan
- 11:30-11:45 *Yoshitaka Kanomata*
Modern human behavior at the Odaino Site Group I: Hunting activities and mineral use
- 11:45-12:00 *Vladimir Kharevich, Alena Kharevich, Ekaterina Bocharova, Anton Anoikin, & Elena Akimova*
The Early Upper Paleolithic of the Yenisei River Basin (Southern Siberia)
- 12:00-13:30 Lunch (Kawauchi Lecture Rooms C [A04])
- 13:30-14:30 Poster Session (Kawauchi Lecture Rooms C [A04])**
- 14:30-17:30 Session III : A close look at Upper Palaeolithic variabilities in Asia**
- 14:30-14:45 *Radu Iovita, Abay Namen, Aristeidis Varis, Emily Coco, Tobias Sprafke, Carlos Cordova, Miriam Belmaker, & Zhaken Taimagambetov*
Settlement and climate fluctuations in the Upper Paleolithic of Kazakhstan: New data from the PALAEOSILKROAD project
- 14:45-15:00 *Mirosław Masojć, Grzegorz Michalec, Przemysław Bobrowski, Maciej Jórdeczka, Byambaa Gunchinsuren, Rafal Sikora, Davakhuu Odsuren, Marcin Szmit, Dashzeveg Bazargur, Józef Szykalski, & Patryk Muntowski*
Gobi Desert dwellers in the Upper Pleistocene – Early Holocene: Discontinuity of inhabitation based on new absolute chronology (Mongolia)
- 15:00-15:15 *Ting Xu, Junyi Ge, & Hanfei Zhang*
New progress in archaeological excavation of Helong Dadong Site
- 15:15-15:30 *Kazuki Morisaki & Akira Iwase*
Demography, climate, and culture change in the Japanese Upper Paleolithic
- 15:30-15:45 *Kyung Jin Kim & In Sun Seo*
Techno-functional analysis on the obsidian burins and burin spalls from Paleolithic sites in South Korea
- 15:45-16:15 Coffee break
- 16:15-16:30 *Valeriya Mikihienko, Maxim Kozlikin, & Natalia Belousova*
Microblades and bladelets technologies in the Upper Paleolithic industries of Denisova Cave, Altai Mountains
- 16:30-16:45 *Ekaterina Bocharova, Pavel Chistyakov, & Ravil Zhdanov*
Composite slotted technologies of Eastern Siberia in the Final Upper Paleolithic
- 16:45-17:00 *Yanhua Song*
Studies on the construction and function of hearths in Shizitan 29, North China
- 17:00-17:15 *Aleksei V. Tetenkin*
Late Upper Paleolithic culture of the population of Baikal-Patom Uplands in the end of Last Glacial Maximum according to the data of Kovrizhka IV site
- 17:15-17:30 *Yu Cao, Mingjie Yi, & Xiaoling Zhang*
A quantitative approach for interpreting the morphological and technological variability of microblade technology
- 17:30-17:45 Closing remarks
- 18:30-20:30 Farewell party
- JUNE 23 (MONDAY)**
- 8:30-18:30 Post-conference excursion
- JUNE 24 (TUESDAY)**
- Departure

2025年度 日本旧石器学会総会のお知らせ

2025年度日本旧石器学会総会を次のとおり開催いたします。本総会は、アジア旧石器協会第12回大会に伴って開催されます。会員の皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

総会の出欠葉書は後日郵送いたします。総会の開催には「委任状を含め、全会員の5分の1以上」の出席を必要とします。ご欠席の場合には委任状をご提出いただきますよう、何卒お願い申し上げます。

日時 2025年6月21日（土）12:10から
場所 東北大学川内キャンパス（Aエリア）
講義棟C棟（下の地図中のA04）
住所：〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41
URL：https://www.tohoku.ac.jp/japanese/profile/campus/01/kawauchi/areaa.html

2024年度 日本旧石器学会 普及講演会報告

標記の普及講演会が2025年1月26日（日）に、明治大学駿河台キャンパスのグローバルフロントを会場にして、明治大学黒曜石研究センターと共催で開催された。

元旧石器学会会長の小野昭氏（東京都立大学名誉教授）が「黒曜石研究のこれまでとこれから」と題して講演をおこなった。このテーマは、資源環境と人類2024シンポジウム「黒曜石研究の射程—その拡張に向けて—」の記念講演として設定された。

標題にある「これまで」では小野氏と考古学的黒曜石研究との関わり、石器石材と生産・流通に関する研究の在り方や実践に焦点を当て、「これから」には今後の研究および研究組織への期待がこめられている。

はじめに、小野氏と黒曜石の理化学分析との出会いについて回顧した。フィッシュトラック法による噴出年代推定や晶子形態による産地推定、水和層測定による年代推定を用いた黎明期の黒曜石研究について触れ、当時の研究の問題点について解説した。晶子形態は、蛍光X線分析法が定着した1980年以後は分析が顧みられることはなかったが、最近、産地を細分する手法として注目され、本シンポジウムでも中村由克が研究例を報告した。

1960～70年代の画期的な黒曜石考古学の研究として、コリン・レンプリー達が行った、黒曜石



産地分析に基づくアナトリアの石器石材需給と文化交流の研究のモデルに触れた。日本においては、1980年代以降、黒曜石産地推定事例の蓄積が進み、黒曜石需給の様相を編年的に解明することが可能となっており、近年では集落構造や台地内、原産地周辺等の小地域における細かな石器石材利用の実態にまで議論が及んでいると評価する。一方で、旧石器時代集団の日常的な行動圏を逸脱していると思われるような長距離の石器石材移動をめぐる解釈を課題として挙げる。新潟県真人原遺跡を具体的事例として示し、北は青森県深浦産、秋田県男鹿産、南は長野県蓼科・冷山産という直線430km内の黒曜石消費について紹介した。

最後に日本の黒曜石考古学に対する希望をこめた課題として、①理化学分析の推進、②黒曜石獲得における人類—自然環境の間の有効環境の検討、③モデル・仮説の追証・反証手続きの議論、④原産地だけに限定されない広がりの中での人類活動、⑤国内外での研究コミュニティの交流を挙げた。特に⑤に関連して、国際ネットワーク構築を進め、問題意識の共有化をめざしていくことを強調された。

今回の普及講演会は考古学の方法論や研究の発展性にも踏み込む難しい内容ではあったが、参加者の多くが石器研究者であったこともあり、反応は良かったように思われる。今後も、社会への研究周知と理解を目的とすることはもちろんだが、研究およびそのコミュニティの発展を意図した普及講演会を計画していきたい。（広報委員会 夏木大吾）

2024年度 日本旧石器学会 研究グループ活動報告

旧石器基礎研究・次世代育成グループ：通称“パレオ・ラブ”では、明治大学黒曜石研究センターとともに、研究集会「石器技術研究をめぐる実験考古学」を2024年6月15日（土）・16日

(日)の二日間、明治大学駿河台キャンパス・グローバルフロントにおいて開催した。基礎研究としての石器製作技術研究や実験考古学研究的の深化と、学部生・大学院生を中心とした次世代の石器研究の推進・発表・交流の機会を設けることを目的とした。

会場には、実験石器製作の先達である大沼克彦博士、実験痕跡研究の御堂島正博士、中堅から若手の社会人研究者のほか、明治・大正・南山・東京都立・東北・山口の各大学の院生・学部生が約50名集ったほか、会の運営にも積極的に携わって、総勢140名の活気のある研究集会となった。プログラムは以下のとおりで、同内容の論考はグループの機関誌『旧石器研究の視座』第3号に掲載予定である。

【15日】

◆趣旨説明「石器技術研究をめぐる実験考古学」
堤 隆 (明治大学黒耀石研究センター)

◆研究発表

「石器は個人を語るかー彫器削片剥離の実験からー」
鈴木美保 (明治大学黒耀石研究センター)

「鹿角ハンマーによる石器製作について」 小菅将夫
(岩宿博物館)・高草木和佳子 (明治大学)

「基部加工尖頭形石器の素材剥離と二次加工に関する実験研究」金彦中 (東北大学)

◆記念講演

「石器の実験痕跡研究ー私的研究の履歴と見通しー」 御堂島正 (大正大学)

◆石器製作ワークショップ

初心者から熟練者まで7名のKnapperが目標を定めて実験に挑み、インタビューも実施

インタビュアー：塩原 健・吉田真優

参加knapper：井元日向子 (東京都立大学)・大場正善・金彦中・小菅将夫・佐藤祐輔 (東北芸術工科大学)・鈴木美保・矢野賢太 (明治大学)

【16日】

◆研究発表

「非使用過程における痕跡：後期旧石器時代前半期の刃部磨製石斧を例に」 岩瀬 彬 (東京都立大学)

「実験被熱痕跡の適用：ニセコ町西富遺跡B地点の事例」 藪下詩乃 (清瀬市役所市史編さん室)

「石器製作者の技術レベルをどう考えるか」 両角太一 (大正大学)

「動作連鎖復原における実験考古学の意義」 大場正善 (山形県埋蔵文化財センター)

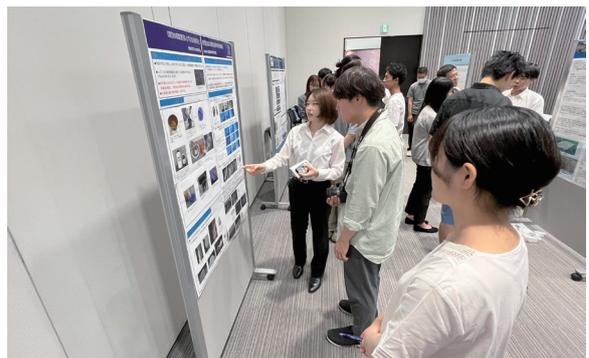
「使用実験から検討する礫群の機能」 保坂康夫 (身延山大学)



石器製作ワークショップ。初学者も熟達者も石割



座談会。10名の学生インタビュー



ポスターセッション。9名の院生が発表

◆パネルディスカッション パネリスト：研究発表者

◆座談会 教えて大沼先生！ (大沼博士と10名の学生・院生インタビュアー)

◆ポスター発表 9名(学部生・大学院生)

「石器製作における敲石の分類と用途」 塩原 健 (明治大学)

「南関東『V層・IV層下部段階』における石材消費と狩猟採集民の移動形態」 春日井杏乃 (明治大学)

「低倍率法による石器機能の推定」 小池里英 (大正大学)

「縄文時代の石器製作における加熱処理」 栗原七海 (大正大学)

「ナイフ形石器の形態と機能」 野口智輝 (大正大学)

「実験考古学からみる遺跡形成過程」 石田 薫 (大正大学)

「宮ノ前遺跡における細石刃製作技術と石材利用の展開」 梅田拓海 (明治大学)

「石器のレプリカ作成と使用痕分析における有効

性」吉田真優（南山大学）

The debitage pattern of biface reduction by modern flintknapper Meng Fanxiu (Tokyo Metropolitan University)

■ 春成秀爾「始原のヴィーナス」講演会

2025年1月18日（土）、明治大学グローバルフロントにおいて明治大学黒曜石研究センターと共催で本講演会を実施した。学生や一般など大勢の参加者があり、初学者がヴィーナス像について学ぶ良い機会となった。（研究グループ代表 堤 隆）

新刊紹介

1. 鈴木忠司著『岩宿時代日本列島の生業と集落』、A5・452頁、同成社。
2. 春成秀爾著『始原のヴィーナス –旧石器時代の女性象徴–』、B5・426頁、同成社。
3. 長井謙治著『石器づくりで何がわかるか 実験考古学教本』、A5・330頁、吉川弘文館。
4. 青木要祐著『海峡を越えた旧石器人類 東北日本における細石刃石器群の技術と石材の変化』新潟大学人文学部研究叢書20、菊版・400頁、知泉書館。
5. 伊藤 健著『後期旧石器時代の新たな遺跡構造論 東京の遺跡を中心に』、B5・372頁、新泉社。
6. 西秋良宏・野林厚志編『パレオアジア 新人文化の形成 考古学・文化人類学からのアプローチ』、A5・512頁、新泉社。

1.は半世紀以上にわたって旧石器、いや岩宿時代の「ヒト・ムラ・暮らし」を丹念に追い求めたその成果を、ていねいにそして実に生き生きと述べた快著。2.はいたずらに古代心性への焦点が当たりがちな象徴遺物や装飾品を考古学伝統のタイポロジーで系統的に体系化したコルプス。3.は類書のない教本。石割り実験のルールはもちろん、一方で石割りを「体験する」ことが秘める考古学への可能性にも言及する。4.と5.は「これでもか」と言わんばかりに徹底して集めた詳細な考古データにもとづいた厚い記述。4.は技術組織論、年代値、黒曜石原産地同定結果から細石刃石器群の広がりを精緻に組み立てた。5.に付された巻末100頁にわたるデータ一覧は、対象時期が限られているとはいえまさしく労作の一言。6.は文部科学省新学術領域研究「パレオアジア文化史学」の成果を一般向けに書き下ろした内容。アジアにおける新人サピエンスの文化形成について、考古学者と民族学者総勢20名が自身のフィールド研究にもとづきこのダイナミズムを探る。

（ニュースレター委員 仲田大人）

お知らせ

日本旧石器学会入会申込み手続きについて

日本旧石器学会入会申込みにつきましては、入会申込書を日本旧石器学会ホームページからダウンロード (<http://palaeolithic.jp/join.htm>) し、必要事項を記載の上、日本旧石器学会事務局へ郵送してください。入会資格審査にあたっては論文等著作物の提出を求める場合があります。ご協力ください。

メーリングリストの運用について

日本旧石器学会ではメーリングリストを運用しています。学会からの連絡手段として利用するとともに、情報交換の場として活用いたします。みなさまへの円滑な情報共有のため、学会員のメーリングリストへの登録は、原則として義務化しております。

メーリングリストへの登録のお済みでない方は、事務局 (jimu@palaeolithic.jp) までメールアドレスをお知らせください。

会費納入・住所変更手続きのお願い

日本旧石器学会は、皆様の会費で運営されていますので、会費は原則前納制としております。

会員の皆様におかれましては今年度分会費の納入をお願いします。振込先は、日本旧石器学会 郵便振替番号00180-8-408055です。全国の郵便局で簡単に手続きいただけます。会費は6,000円です。

会費滞納は本会運営に大きな支障を招く原因になりますので、2024年度以前の会費を未納の方は、未納分もあわせて納入をお願いいたします。

転居をされた方は、必ず住所変更の手続きをお願いいたします。郵便局に転居届を出されていても、本会では郵便局以外の配送会社を利用していますので転送していただけません。会費納入の際に払込取扱票に新住所を記載いただくか、または事務局までメール等でご連絡ください。

日本旧石器学会ニュースレター 第59号

2025年4月30日発行

編集：日本旧石器学会ニュースレター委員会

仲田大人・夏木大吾・上峯篤史

発行：日本旧石器学会

事務局：〒206-0033 東京都多摩市落合1-14-2

東京都埋蔵文化財センター調査研究部 尾田識好方

E-mail jimu@palaeolithic.jp

HP <http://palaeolithic.jp/index.htm>